ウルメイワシ　*Etrumeus teres*

目が脂瞼（しけん）と呼ばれる透明な膜でおおわれているため、潤んだようにみえることからウルメイワシと呼ばれます。県内では単にウルメと呼ぶほか、幼魚をウルメゴ、特大魚をテッポウウルメと言うこともあります。丸干しに加工されるほか、新鮮なものは刺身やつみれでも美味です。仔魚はシラスとしても利用されます（シラスの項参照)。

生物特性

高知県で漁獲されるウルメイワシは太平洋系群に属し、西日本の太平洋側に分布します。本種は、同じいわし類のマイワシやカタクチイワシと比較すると暖海性で回遊範囲が狭く、例えば産卵のために遠くへ行くようなこともありません。そのため、産卵量から親魚の分布状態を推定することができます。その結果、ウルメイワシ太平洋系群の分布の中心は、土佐湾であると考えられています。産卵期は 10～7 月と長期にわたり、産卵盛期は 2～7 月と 11～12 月です。いわし類の中では成長が速く、1 年で被鱗体長約 21cm に達します。寿命は短く、約 2 年と考えられています。

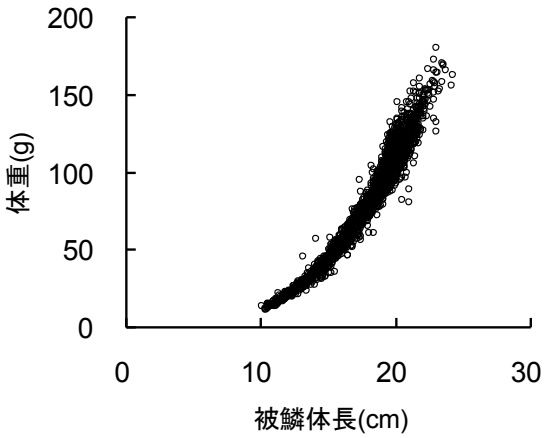

図 1　高知県産ウルメイワシの被鱗体長と体重の関係（平成 17 年～22 年の測定データに基づく).

資源動向

ウルメイワシ太平洋系群の資源水準は、平成 15 年 (2003 年) 以降増加傾向にあり、平成 19 年（2007 年）にピークを迎えました。しかし、その後は減少傾向に変わったと考えられます。平成 22 年度の資源評価では、水準は「中位」、動向は「減少」傾向にあるとされています。

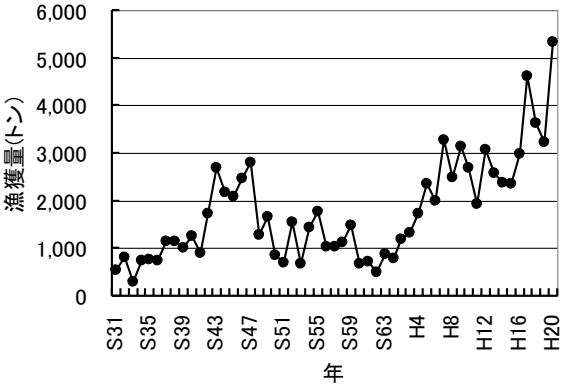

図 2　高知県下におけるウルメイワシ漁獲量の推移.

県内の漁獲動向

高知県内におけるウルメイワシ漁獲量は昭和63年(1988年)以降増加傾向にあり、平成 20 年（2008 年）には 5,329 トンのピークに達しました（図 2)。これは、先に述べた太平洋系群全体の資源動向とよく一致します。主に宿毛湾のまき網と、県内各地の定置網により漁獲されます。また、土佐湾では多鈎釣りによるウルメイワシ漁もさかんです。

宿毛湾の中型まき網では、ほぼ周年漁獲されますが、1～2 月には少ない傾向があります。定置網では 4～12 月に漁獲されます。定置網、まき網とも、8～9 月に漁獲量が一時的に落ち込む傾向があります（図 3)。

春になると、その年生まれのウルメイワシ 0 歳魚（5cm 程度）が定置網やまき網の漁場に加入し、成長しつつ漁獲されます。同時に、前年生まれの 1 歳魚も漁獲されます。夏になると 1 歳魚の多くは寿命となり、姿を消します。その後は、0 歳魚が成長しながら漁獲され続け、翌年春の漁へとつながっていきます。さらに、本種は定着性が強く、あまり大きな回遊はしない、という特徴もあることから、ある年の上半期における 0 歳魚の加入状況からその年の下半期の漁況を、下半期の 0 歳魚の漁況から翌年上半期の漁況を、それぞれ予測することができます（図 4)。

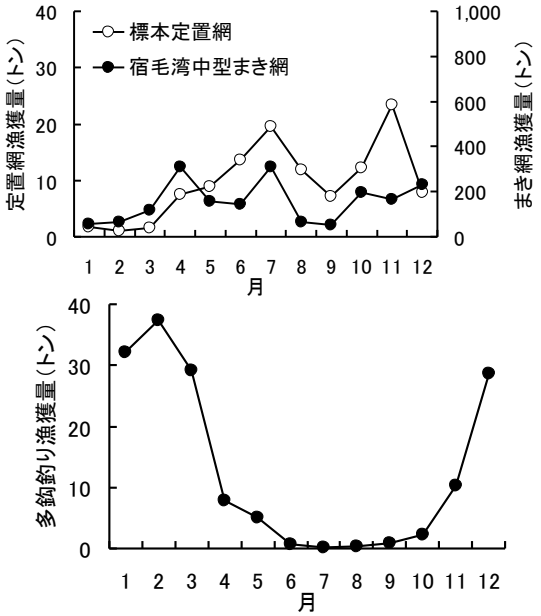

図 3　標本定置網と宿毛湾の中型まき網（上段）及び宇佐漁協の多鈎釣り（下段）によるウルメイワシの月別漁獲量. 平成 11 年～平成 20 年の平均値で示す.

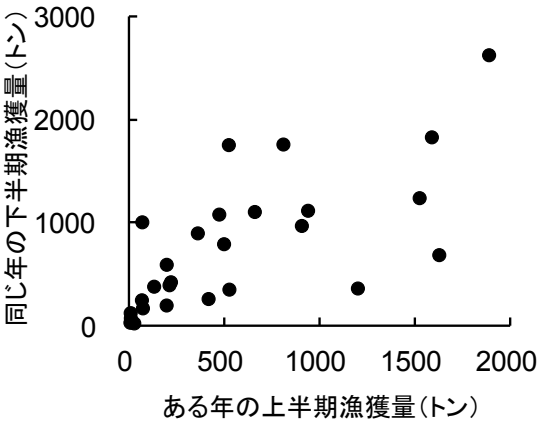

図 4　ある年の上半期のウルメイワシ漁獲量と、同じ年の下半期の漁獲量の関係. 上半期の漁獲量が多い年は下半期も多い傾向がみられる. 宿毛湾の中型まき網による漁獲量データから作成.